

黎明期の

エキュメニカル・ムーブメント

—— 1850年を中心として ——

藤 間 繁 義

(I)

は じ め に

(II)

1. 社 会 的 背 景
2. 宣教活動の進展と超教派運動
3. キリスト教社会活動

(III)

む す び

(I)

は じ め に

1959年、ローマ・カトリック教会の教皇ヨハネス23世による全教会会議開催の通告と、プロテスタント教会に対してなされた教会一致の呼びかけとは、ただにローマ・カトリック教会のみならず、今世紀初頭より多くのプロテスタント教会の参与のもとに力強く推進されて来たエキュメニカル・ムーブメントにとっても、一大転換期を画す意義深いものであった。すなわち、3年の月日¹⁾をかけ、数次の準備的な会議を経た後、1962年10月11日（木）には、第二ヴァチカン公会議の開会が、同教皇によって宣せられたのであった。かくして、1517年マルチン・ルーテルによって宗教改革の口火がきられてより450年にわたって、互いにうち融け合うことのなかったプロテスタント教会との間の、「隔ての中垣」をとり除こうとする積極的なローマ・カトリック教会の姿勢が明らかにされたのである。それは、キリストの体としての教会のあるべき姿について、聖パウロが示しているところであり、一致を求めるための謙遜にして、し

かも、確信にみちた決断であつた。²⁾

このような、ローマ・カトリック教会のエキュメニカル・ムーブメントにたいする積極的な態度と、第二ヴァチカン公会議以後に展開されつつある同教会のこのムーブメントへの参与とは、ヨハネス23世の貢献によるところきわめて大である。同時にまた、それは、今日の激変する社会におけるキリストの教会が、*una sancta* としてこの世に対する使命を果たして行くためには、通過しなければならない教会革新の段階であつたし、社会情勢からの要求に応答するためには必要なことであつた。³⁾

そもそも、今世紀の初め頃から急速に展開されて来たエキュメニカル・ムーブメントは、革命的な進展をたどりつつある社会と、激動を続ける世界の情勢とに対する、教会の使命の再発見であり、そのための実践的な活動であつた。19世紀後半からアジア、アフリカの伝道地において宣教師達の間から提起されるようになって来た諸問題は、ただ単に教会の再合同のみを願うショート・サイトのものではなくて、政治、経済、社会、の各分野、殊に、避難民、病人、寡婦、孤児、あるいは、天災罹災者等に対するキリスト教会の関り方を根本的に問いなおすものであつた。⁴⁾そして、このことは、実際には、初代教会以来、世の光、地の塩、としての教会の第一義的な使命であつて、キリスト自らも言明されているものである。⁵⁾それにも拘らず、狹隘なセクト主義や教条的な正統主張の萌芽は使徒達の時代にすでに見受けられるところであり、⁶⁾ことに宗教改革以後の各時代を通じて今日見受けられるような教派的教会の出現をもたらしたのであつて、エキュメニカル・ムーブメントが、いわゆるリュニオン・ムーブメントの意味をもちながら展開されて行つたという歴史的過程についても充分靚い知り得るところである。

それゆゑ、エキュメニカル・ムーブメントが、*una sancta* として全世界、全人類に対する使命を果たすものであるという見解は、われわれの基本的な見解であつて、S・C・ニール (Stephen Charles Neill) 主教は、R・ローズ (Ruth Rouse) との共編「エキュメニカル・ムーブメントの歴史」の中において詳細に亘つて展開されている。⁷⁾しかしながら、宗教改革以後の教派形成ならびに分裂の状況は、それぞれの教会が、信仰において *credo sanctam ecclesiam catholicam, sanctorum communionem* と告白する限りにおいては、キリスト

の教会が元来一つであるというわれわれの立場は極めて明確であり、ニール主教の立場にも些かの誤りも存在しないのであるが、それにも拘らず、可見的な教会が分裂と闘争の歴史を歩んで来た事実を併せ考え、20世紀に入ってからこの運動の進展状況と比較する時、19世紀迄のエキュメニカル・ムーブメントは、まさに長い夜明け前の状況下にあった、と言わなければならないだろう。したがって、19世紀後半から1910年英国のエディンバラにおいて第一回 I M C (International Missionary Conference) が開催されるまでを、長かった「夜明け前」についてやっ来た輝やかなしい「黎明期」と考えるのである。それは、まさしく1910年に開催された I M C の会議の後、澎湃として世界大の広がりで開催された Faith and Order および Life and Work とこの運動との三つの流れを主軸とする力強い運動の前段階をなすものであった。⁸⁾

(Ⅱ)

1. 社会的背景

われわれがエキュメニカル・ムーブメントの黎明期と呼ぶ時期は、一般社会において多様な変革を遂げた時期であり、キリスト教会もまた急激に変化する世界の情勢から孤立無縁の状態で存続することは出来なかった。すなわち、さきのヨーク大主教 C・ガーベット (Cyril Forster Garbett, the Archbishop of York, 1875—1955) は、過去半世紀の変化のめざましさについてその著書 In an Age of Revolution の中で興味深い説明を行なっている。「最近50年間に起った社会の変革は、キリストの降誕から19世紀半までに起ったことよりも遙かに大きなものがあった。むかしは変化が緩漫に、漸次的に起って来たものであるが、産業革命がその変化のペースを変えてしまったので、われわれが生まれて育って来る間に経験する出来事の方が、過去数千年にわたって人類が経験して来たものよりも遙かに変化に富むものである。¹⁰⁾」と述べて、自動車、航空機、電波等に具体的な例をあげながら、前世紀後半から今世紀初頭にかけての社会変化の様相について独自の見解を述べている。人間が従事する生産のための技術は、樂園を追放されたアダムが始めて鋤を発見してからこのかた、時代々々の産業の形態に適合したものとなるように変革を遂げて来た。ことに18世

紀には、人口の全般的な増加と生活水準の向上とによって、大規模な通商ならびに生産を必要とするようになり、生産力を急激に増大せしめるような機械—技術の発明および発見が相次いでなされ、いわゆる産業革命をもたらしたのである。ワット (James Watt 1736—1819)、ハーグリーブス (James Hargreaves —1778)、ホイットニー (Eli Whitney 1765—1825)、による蒸気機関、紡績機、繰綿機の発明は、手工業に頼っていた紡績業を大工場による近代的な生産方式へと転化せしめ、農業中心の経済は一躍して都市中心の商工業中心の経済政策に重大な関心が払われるようになって来たのである。¹¹⁾さらに、産業革命と自由放任経済の確立とは、剰余利益の再投資によって資本蓄積を伴うこととなり、造船、航海の技術の発達と相まって、ヨーロッパ人の海外進出、植民地獲得競争を出現することとなった。

いうまでもなく、南北アメリカ、アジア、アフリカの諸民族は、イギリス、フランス、スペイン等々のヨーロッパ諸国の植民地として政治的な圧迫を受けて来たのである。ところが、これら先進国内部における資本家階級による労働者階級の搾取と平行して、植民地が剰余資本の投資の対象としてクローズアップすることとなるや、これら後進地域の植民地は、政治的のみならず、経済的にもまたその本国の支配を受けることとなったのである。¹²⁾こうしたヨーロッパ諸国の帝国主義的な植民地獲得競争は一層熾烈を極め、アメリカ大陸では、英仏二国が争い、英国の如きは、北米、インド、東南アジア、中近東、アフリカに広大な植民地を経営し、その領土内に日の没することなき大繁栄を誇る大帝国を築いたし、フランスはもとより、国内事情から遅れて帝国主義の競争に登場して来たドイツもまた植民地を求めて狂奔することとなったのであって、ハールビーによれば、ここに第一次世界大戦の兆しがすでに予見されているというのである。¹³⁾

他方、産業の発達と機械工業の進歩は、当然それによって、人間により多くの余暇と福祉とを提供する筈であった新技術の開発が、却って膨大な人的資源を注入することを要求することとなり、労働問題に対する人々の覚醒を促がすこととなったのである。それにつれて、こうした女工哀史的な労働条件の改善と労働者の地位向上をはかる運動が、単に一企業、地方的連繋の中だけではなしに、広く国際的にも展開されるようになって来たのである。空想的社会主義

を唱えたロバート・オウエン (Robert Owen 1771—1858) や、宗教的情操をもって社会主義の理想を実現しようとしたサン・シモン (Saint Simon 1760—1825) 達の活躍は19世紀前半にすでに現われていたし、カール・マルクスの共産党宣言がなされたのは1848年であって、約半世紀を経た1917年には、世界最初の共産主義革命を経てソ聯が誕生する程、世界全般にわたって共通の問題として自覚されていたことを物語るものでもある。ことに、1840—1842年には、英国の露骨な帝国主義政策として非難多き阿片戦争があり、1848年には共産党宣言、1865年には、1861からの烈しい戦いの後に奴隷解放の宣言がなされ、1868年明治維新を達成する等々、国際的にも、大きな変化を遂げた時期であった。¹⁴⁾

2. 宣教活動の進展と超教派運動

こうした複雑な社会にあって、キリスト教が無関係でなかったことはすでに指摘したところである。ガーベットによれば、人口増大と産業化とは、英国の都市の様相を変えてしまい、1801年から1831年までの30年間に500の教会が建築されたのに比較して、1831年から1851年の間の20年間には、2,000の教会が建築された程である。けれども、他方、多くの都市が教会や聖職なしで存在するようになり、子供達は、洗礼を受けないまま放置されたり、或いは、宗教的な要綱について教えを受けることもなしに、幼少の頃から労働に駆り立てられるようになって行った。その結果、教会は、子供達に対しても、成人に対しても、道義の頹廃や青少年の不良化の問題について警告を発し、これらの諸問題と積極的に取組むことは、すなわち、キリスト教会にとっての直接的な使命であるという主張する者さえ現われる程であった。¹⁵⁾

さて、約50年前、1901年に聖職按手を受け、学生時代には、オクスフォード大学のキーブル・カレッジで学生会 (Oxford Union) の委員長をしたこともある老犬主教ガーベットにとって、たしかに上述の如く、この50年間は変化に富み、その中に住む人々が常に大きく揺り動かされ続けた時代であった。しかし、同師は、その著、「英国聖公会の主張」の中で、こうした変化に富んだ50年間の歴史のうちで、最も特筆すべきものとしてエキュメニカル・ムーブメントをあげている。¹⁶⁾

われわれは、すでに、本稿1において、エディンバラのIMC会議が、エキュメニカル・ムーブメントにおける一つの転換を画すものであることについて触れて来た。そして、それは、たしかに、エドワード・ダフの指摘するように1948年 アムステルダムにおいて開催された世界教会協議会 (World Council of Churches, W.C.C. と略記す) とももに、エキュメニカル・ムーブメントにおける歴史的な出来事であった。¹⁷⁾ しかしながら、このエディンバラにおけるIMCの会議が開催されるより半世紀も前から、キリスト教会においては、真摯な努力が積みあげられて来たことを見逃しにすることは出来ない。また、この半世紀の間に起って来た超教派的な運動を正しく評価して、はじめて、IMC会議以後のエキュメニカル・ムーブメントを正しく理解し得るものと考ええるものである。

すなわち、ヨーロッパ諸国の帝国主義的な植民地進出にともなうて、教会も新興資本家階級の味方となり、アジア、アフリカの諸国民に対して、医療設備を与え、教育機関や、福祉施設を設けながら、たしかに教会は大きな貢献をして来たのではあるが、白人国家による有色人種の搾取に対して、正面から抗議することとはなかった。しかしながら、この様な教会の姿勢に対して、アジア、アフリカの伝道地において、日夜、土着の人々と生活を共にしながら、キリストの福音を説く宣教師達の間からの反省が次第に表面化するようになって来た。人間は、誰しも自らの生まれ、育って来た環境に安住している時よりも、むしろ、全く異った環境の中に投げ出されて、外から今迄自分が安住していたところを客観的に観察した場合に、しばしば鋭い批判の眼を開かれるものである。そして、このことは、遠く母国を去って、植民地において伝道に従事していた宣教師達の経験を通して湧然と起って来たのである。

こうした批判は、まず第一に、キリストの体として当然一つであるべき教会が、互いに教派意識に燃えて伝道に従事していることに対する批判として起って来たのである。ダービー教区主教A・E・J・ローリンソンは、次の様に指摘している。「われわれが、彼らの直面している課題を考える時、その課題は、一方では圧倒的暴威をふるっている非キリスト教的勢力の中で真のキリストの証を担っていることであり、他方、夥しい数のインド教徒に対して伝道することである。それらの問題は、インドに在る諸派の教会をして合同への召命

が、分裂のままで異教徒に向うよりも遙かに意義深いものであることを容易に理解せしめるものであった。……長老派教会と聖公会との相異は、キリストを礼拝するものと牛を礼拝するものとの相違を比較することによって無意味なものとなるのである。」¹⁸⁾と。

そもそも、先進文明を誇るヨーロッパの母国を去って、気候風土を異にし、皮膚の色、生活習慣を異にする異境の地に伝道する宣教師達の心を燃えたたせたのは何であろうか？それは、いうまでもなく、彼らが身をもって体験したところの福音の真実に触れた喜びによるものである。神の福音をわが身に体験すること、すなわち、永遠の生命をもつということは、自らもまた、その福音を語っているかということにかかっているのであり、他に対して福音を宣べ伝える時にのみ最もよく自らのうちに福音に接し得た喜びを感得し得るのである。そして、このような福音宣教の同志的な交りにおいては、それぞれの育くまれ来った環境や伝統は第一義的な意味をそう失してしまうものである。したがって、伝道地においてたまたま相集う宣教師達は、分裂せるキリスト教会の在り方を嘆じ、協力と親和のうちに、一つとならんことを祈り合うようになったのは蓋し当然のことである。しかもこうした協調の気運は、新らしい幻と新規な生命力とを宣教師達の間に培ったのであって、1792年、バプテスト教会伝道会社の創立に貢献したウィリアム・カーレーは、いち早く今日のエキュメニカル・ムーブメントの発展を予言していたのである。¹⁹⁾

このような教会分裂の状況に対する反省はただに海外の伝道地のみならず、ヨーロッパにおいても青年キリスト者の間からも起って来たのであって、異った教派に所属するキリスト者達の間、隔ての中垣を超越した交りを確立しようとする活動が芽生え始めたのである。1840年から1850にかけて、世界中のキリスト者の国際的、超教派的な機関を樹立しようとする望みが急速に浸透して行き、1846年には、ロンドンにおいて福音主義同盟 (The Evangelical Alliance in London) が創設された。これは、どちらかと言えば、教派主義にも、極端な教派否定的立場にも、また、カトリック的な立場にも反対を表明する個々のキリスト者達の集団としての印象を与えていたが、ロンドンにおいて開会した際には、約50の各派教会に属する人々が参集した。その同盟参加者は、聖書の権威、三位一体の信仰、信仰義認、二大聖奠等九ヶ条のプロテスタント的

原理を承認する者であれば受容られたのであった。ルーテル教会は最初からこの運動に対して冷淡な態度を示しておったが、ヨーロッパ諸国のみならず、アメリカに支部を組織し、海外伝道も行ない、1907年迄の間に世界会議を開催した。ことに、一年の最初の週を同盟会のための祈禱週とし、ローマ・カトリック教会などの圧迫のもとにあるプロテスタント教徒の援助なども行なったのである。²⁰⁾

さて、この同盟の設立された1846年という年は、聖公会にとっても意義深い年であった。すなわち、それは、C M S (Church Missionary Society) の宣教師レブマンによってケニア伝道が開始された年であり、また、英国聖公会の宣教師ベッテルハイム (Bernard Jean Bettelheim 1811—1870) が、日本に至る門戸として琉球伝道を志して那覇に上陸したのも、この年の5月であった。このベッテルハイムは、ハンガリー生まれのユダヤ人で、英国婦人と結婚し、英国の民籍をもった医師であった。支那から日本への伝道を要望した英国東洋艦隊の乗組員達の提唱と努力によって1843年に組織された英国海軍琉球伝道団 (The Loochoo Naval Mission) の宣教師として英国を出発し、9ヶ月の後ようやくにして目的の港に到着したのである。²¹⁾ 故国を離れて伝道に従事する人達の労苦は、まさに言語に絶するものががり、殊に、日本の場合には徳川幕府の鎖国政策が苛酷な弾圧を加えており、彼が上陸した那覇においてさえも、島津藩の出先官憲の圧迫を受けなければならなかった。こうした宣教師達の直面した困難は、必らずしも日本のみのことではなくて、洋の東西を問わず、あるいは、気候風土や土着人の対応如何にかかわらず、想像を超えたものであることは言うまでもない。

したがって、すでに述べたように、土着の異教徒とキリスト者との相違の前には、キリスト教会内の教団—教派の相異は無に等しいという印象を抱くことは当然であり、宣教師達の間での理解と協調は教会一致の祈りをこめた協力奉仕へと発展して行くのである。それは、英国聖公会のインド伝道において早くから見受けられてきた。例えば、1827年インドにおける宣教師の不足から、S・P・C・K (Society for Promoting Christian Knowledge) は、オランダ・ルーテル教会の宣教師として同地に滞在していた主教から按手を受けた同派の聖職達を備って宣教に従事せしめておったことや、これらルーテル派の人達は、

1828年以降、この地方の伝道事業が S・P・C・K・ から S・P・G・ (Society for Propagation of the Gospel) に委ねられた時にも引続き聖公会の聖職達と協力して伝道に従事していたのである。

さて、このように福音主義同盟の活動が盛んとなり、海外において宣教に従事する人々の協力が進められつつあった時、これに大きな刺激を与え、エキュメニカル・ムーブメントを今日の状態に迄到達せしめる原動力ともいふべきグループ活動が起って来た。それはすなわち、Y M C A (Young Men's Christian Association) 運動であった。

この運動は教会の組織的な運動ではなくて、平信徒クリスチャンによってなされているところに特別の意義がある。その目的とするところは、キリスト教の信仰に基づいて、会員相互の人格の向上と、責任の精神の高揚をはかり、キリスト教の理想とする社会の建設を目的とする青年信徒の実践活動である。すでにわれわれが指摘したように、19世紀初頭における資本主義の発達、労働問題、青少年問題を誘発したのである。この様な資本主義社会によってもたらされた青少年の問題を、キリスト教信仰に基づく活動によって克服しようとして起ったのが、このY M C A運動である。すなわち、青少年労働者の悲惨な状態を見て、友人とともにキリスト教信仰に基づく祈禱と奉仕の活動を展開したのは、若冠22才の青年ジョージ・ウィリアムス (George Williams 1821—1905) を中心とする少数の青年達の活動であった。彼は、ヒッチコック・ロジャース商会という呉服店の店員であったが、商会の主人の協力を得てY M C Aを設立したのは1844年6月6日であった。この青年による青年のための運動は、イギリス国内のみならず、ヨーロッパ、アメリカの各地に驚異的な早さでひろまり、1855年パリにおいて最初の世界大会が開かれた。

このとき8ヶ国38のY M C Aから99名が集まり、世界Y M C A同盟を結成し、いわゆる「パリ標準」²²⁾を定めた。この運動は「みんなのものがひとつとなるために」²³⁾というキリストの言葉をモットーとしてかけ、1894年の50年祭の時には、その数893、会員数87,500を数え、2,000名の参加者が記念世界大会に出席したし、今日では70ヶ国に約13万のY M C Aがあり、会員の数も430万人を数える程になった。

他方、青年女子の間にキリスト教を伝えようとする目的のもとにY W C A

(Young Women's Christian Association) が、青年女子を対象として活潑な婦人運動を展開した。YMCA がパリにおいて世界同盟を結成した1855年にロンドンにおいてYWCA の創立を見たのであるが、これまたYMCA 同様に驚く程のいきおいで世界各地にひろまった。

これらYMCA、YWCA と密接な関係をもって発達した学生キリスト者の活動もまた急速に拡大して行った。学生キリスト教運動は、国によってはSCM (Student Christian Movement) と呼ばれ、あるいは学生YMCA と呼ばれる違いはあるけれども、大学共同体の構成員である学生と教授達とによって主導されるところにその特色がある。この運動は、1895年、ヨーロッパならびにアメリカにおける指導者達によってWSCF (World Student Christian Federation) を結成して国際的な学生活動を展開するようになった。初代の総主事にはアメリカのジョン・R・モット (John Raleigh Mott 1865—1955) が就任した。これは、全世界の学生キリスト教運動を結合し、大学における福音の証しと、学生の信仰生活の訓練ならびに実践を目的としてその運動を進めるものであるが、エキュメニカル・ムーブメントにおいて指導的役割をになう多くの人々を輩出してきたのであって、われわれが枚挙するにいとまのないほどである。²⁴⁾

3. キリスト教社会活動

さて、YMCA とYWCA が青年男女の間に超教派的な運動を展開して行ったのと時を同じくして、前述の福音主義同盟による世界中の宣教師達の会議を行なうことが計画されておった。この同盟の全世界に福音を宣べ伝えんとする目的からして当然のことではあるが、第1回国際宣教師会議を1854年に開催する計画が、いち早く英国同盟の年次総会において提出され、インドにおいてキリスト教育関係の仕事に従業しているアレキサンダー・ダフ (Alexander Duff 1806—1878) を議長としてこれが検討に当たったのであって、これが1907年の世界大会の後になって、エディンバラのIMC 会議に至る道筋の青写真的な役割を果たすのである。²⁵⁾

ところが、こうしたキリストの福音にあずかる喜びを、自らもまた他に宣べ伝えることによって生き生きと体験するという宣教を主眼とする運動の他に、

具体的な社会問題に対して積極的な闘いを挑むキリスト教徒の国際的な活動が起って来た。

英国における年少労働者、都市への人口移動とそれに伴う諸種の弊害については、われわれのすでに指摘したところである。²⁶⁾しかし、ここでキリスト教会、ことに福音派の社会運動についていまだ少しの検討を加えることは、19世紀後半の World Alliance for Promoting International Friendship through the Church から20世紀の Life and Work の活動に進展して行く経過をたどるうえに有意義であろう。

すなわち、この時期におけるキリスト教信仰に基づいた社会運動を実践した人には、まずアンソニー・アシュリー・シャフツベリー卿 (Anthony Ashley Cooper, Seventh Earl of Shaftesbury 1801—1885) があつた。彼は福音派の信徒であつた乳母によって導かれ、14才の時に、貧しい人、抑圧された人々に生涯を捧げて奉仕する決意をしたと言われている。彼によれば、善は個々の事物の属性ではなくて全体との調和であり、したがって人間の善である徳も自己愛と社会愛との調和において成り立つ。それ故、現実の社会において徳を全うするためには幸福な社会を造り出すための献身が必要であると考え、上、下院議員として、また社会思想家として才能を発揮した。²⁷⁾彼は、炭坑や工場における婦人や青少年を搾取と不遇に悩まされている生活から救済するための法律設置に力をつくした。かれが、16才未満の少年が困難で危険な煙突掃除をすることを禁ずる法律の通過を確保したのは1840年であり、1842年には、婦人や10才未満の少年労働者の鉱山労働を禁止する法律を通過せしめたのである。更に、ベッドラムの精神病院では、かつて公衆から入場料をとって狂態の見物を許す習慣があつたが、シャフツベリーの活動の結果1845年このような精神病院に²⁸⁾いる狂人を保護する法律が制定された。

また、19世紀初頭慈善運動家として、代議士として1907年奴隷売買禁止法を制定せしめたことで著名なウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce 1759—1833) の第3子サムエル・ウィルバーフォース (Samuel Wilberforce 1805—1873) もこの頃のキリスト教社会運動の一方の指導者であつた。彼は、父ウィリアム・ウィルバーフォースの生前より献身の決意を抱いてオックスフォード大学を経て23才の時英国聖公会の執事として按手を受けた。

父の死後、1845年にウィンチェスターの教区主教に任ぜられ25年の長きにわたってその職を奉じたのであるが、彼のキリスト教社会奉仕者としての活躍はこの時代に行なわれたのである。彼は、ただに英国教会のみならず、ニューマン (John Henry Newman 1801—1890) が去った後の最もすぐれたプロテスタントの指導者として活躍したのであって、殊に貧民教育に力を尽した。

さらに、チャールズ・キングスレイ (Charles Kingsley 1819—1875), J・F・Dモリス (John Frederic Denison Maurice 1805—1872), T・カーライル (Thomas Carlyle 1795—1881) 達の指導する社会運動は、キリスト教社会主義派を創設して活潑な活動を展開した。キングスレイは、英国聖公会の聖職でありながら、むしろ、社会小説の作家として、あるいは、キリスト教社会主義者としてよく知られており、彼が当時の労働者階級の悲惨な生活ならびに就労状況について描写している「酵母」(Yeast)と「オールトン・ロック」(Alton-Lock) という社会小説を刊行したのは、1850年のことであった。同じ頃、モリスはロンドンのクインズ・カレッジの設立に尽力した後、その著書「神学エッセイ」(Theological Essay) を1853年に刊行したが、この書における彼の時間論が鋭い批判を受けることとなったために教授職を引退して、社会活動に力を注いでいた。翌1854年、彼は、ロンドンに労働者のための学校を設立してその校長をしていた。もとより、モリス自身は、必ずしも正統的な立場ではなかったとはいえども、この時代における最き傑出した神学者であって、キリスト教思想においてもその影響は大なるものがあった。しかしキングスレイ、カーライル達とともに展開したキリスト教社会主義の思想は、同じ頃展開されたマルクス (Karl Heinrich Marx 1818—1883), エンゲルス (Friedrich Engels 1820—1895) の唱えた科学的マルクス主義の思想ほどに華やかな展開は見なかったが、それでもなお、社会奉仕の福音として各国に大きな影響を与えることとなった。ことに、シャフツベリー、ウィルバーフォースの活躍にも見受けられるように、彼らの活躍の舞台であったイギリスにおいては、議員、有力者の中にもキリスト教社会主義の政策を採用する者が出現したり、英国人の議会政治への適合性が高かったことも相まって、着実な社会福祉国家への道をたどるようになった。さらに、このモリス達の指導した社会的福音は、後年 (1900—1920年頃) アメリカにおいて同様の思想を形成したドイツ系バプテスト派の牧

師ラウシェンブツッシュ (Walter Rauschenbush 1861—1918) にある感化を与えて、同国内における社会的福音 (Social Gospel) を推進せしめるのである。²⁹⁾

さて、われわれは、1850年代の英国における代表的なキリスト教社会主義者達の活動について述べて来たのであるが、社会的福音の思想は、ルース・ローズが述べているように、単にモリスやキングスレイ達数々の傑出した個人の尽力によって為されたものではない。“Maurice and Kingsley translated their faith into terms of social reform in the Christian Socialists', Working Men's Colleges, and Co-operative Movements.”³⁰⁾ という句に示されているように、名もない多くの同労者達の共同作業の中に溶け込むことによって、却って彼らの真価が発揮されたものである。

ドイツにおいても、シュテッカー (Adolf Stoecker 1835—1909)、ハルナック (Adolf von Harnack 1851—1930)その他の人々が、いろいろな神学上の立場や教会の伝統を克服しながら、超教派的な視野から社会奉仕活動を展開して行った。彼らの運動原理は、モリス、キングスレイ、カーライル達によって代表される 1850 年代の英国のキリスト教会主義によって感化されたものであって、後に1890年には福音社会会議 (Evangelish Sozialer Kongress) を創立するのである。しかし、この会議の青年層がナウマン (Joseph Friedrich Naumann 1860—1919) の指導を受けるに至って、政治的にも、神学的にも、極端に過激なものとなって、シュテッカー自身はこの会議を脱退して自由教会社会会議 (Frie Kirchlich Soziale Konferenz) を創始するのである。

また、フランスにおいても、このような他教派の教会と協力して福音の宣教と社会実践に当ろうとする運動を起すことにおくれはとらなかった。1855年パリにおいて世界YMCA同盟の結成ならびに、その世界大会が開催されたことについては、われわれが、すでに述べて来たところであり、当然のことながら、パリを中心としてフランスにおけるこの運動を通じてプロテスタント教会の青年達が協力態勢を組むことが可能であった。こうした中で、キリスト教社会運動もまた徐々に生長して来たのであって、例えば多くのプロテスタント教会区内で、正統派とリベラル派とが協力して無欲な奉仕を行なうことが約束された。そのみならず、善行を為そうとする意志の一致がすでに見出されてい

るところでは、社会的キリスト教の仲間達は、お互いの間には教理の相違は問題にならないことを体験して来たのである。この運動がやがて Life and Work に継承されて行くのであるが、フランスのキリスト教社会運動を展開した人々には、ファロット (Tommy Fallot), ゴーネル (Elie Gounelle), モノッド (Wilfred Monod) 達があった。

さて、こうした教会による社会改良を目指したエキュメニカル・ムーブメントは、ヨーロッパのみに止まらなかった。モリス達の感化が、ウォルター・ラウシェンブッシュに及んでいることについては既に述べたが、独立後急速な生長を遂げつつあった米国は、奴隷解放、人権宣言、等の民主的な政策を掲げて努力しつつあったが、工業化と都市化の現象の中から別種の問題を抱いていた。米国に工業化が進展して行ったのは、南北戦争およびその後の時代であった。ことに1890年以後になるとこの趨勢はますます眼を瞠るものがあった。すなわち、製粉所、鉱山、あるいは工場などに多くの就労者を供給するために、南欧や東欧からの移民が増大して、デトロイトやシカゴのような大都市の成長がもたらされた。

このように、他国からの移民や地方出身の就労者達は次第に都市の人口過密地域に定着し、もともと住んでいた人々は教会とともに郊外に移転して行くという、都市中心部のスラム化現象が起って来た。こうした問題の挑戦にこたえようとするキリスト教会の努力は早くも1850年に都市に住む零落民の物質両面の危難、窮乏を救済する多様な都市救済伝道組織を組織することとなってあらわれた。そして、1864年には、アメリカ聖公会は都市伝道の社会奉仕機関を設置し、貧民、家なし、病人、等々を救済するために、孤児院、伝道団体、病院、老人ホームその他の機関を設けて積極的な奉仕活動を開始したのである。し、他教派においても、それぞれ、こうした新らしく起って来た問題の解決に乗り出し、互いに他教会と協力して成果をあげるようになって来た。例えば、1851年ボストンにYMCAが生まれ、ニューヨーク、シカゴその他順次大都市において、都市青年の心に火を点じ、YWCAもまた1866年創立され、それぞれ、大都市における青年男女に対して、聖書研究、下宿、スポーツ、あるいは社会活動の機会等々を与えたのである。その他、1872年には、ニューヨーク・ウォール街伝道会の賭博、飲酒、悪徳の中心に対する挑戦、浮浪者の保護、人

心教化のための積極的福音伝道等があり、やがて20世紀の社会的福音へと発展して行くのである。他方、1867年には最初のランベス会議（Lambeth Conference）が召集され、全聖公会の連帯性を強調し始めているが聖公会のエキュメニカル・ムーブメントについては機会を改めて詳細に検討を加へるつもりである。

（Ⅲ）

む す び

19世紀というのは、キリスト教の教会にとって多難な時代であった。教会が過去十数世紀にわたって保持してきた信仰をおびやかすいろいろな思想および現象が起ってきたからである。合理主義の思想に根幹を置く聖書の原本批評学あり、営利をのみ追求する資本主義は植民地獲得競争を呼び起し、あるいは、進化論、共産主義等々、どれ一つをとりあげてみても、それぞれに教会の伝統的な信仰に対して真向から挑戦状をつきつけるものであった。しかしながら、こうした諸々の思想もしくは現象に対して、キリスト教教会もまた自らの体質の変革と、社会的実践に踏み出すことを通して、却ってこの世に生きる教会の在り方を把握して来たのである。

すなわち、キリストの体としての教会が、従来のように、自らの保守的な殻のうちに閉じこもっているならば、塩気の失せた塩の如く道に投げられ、足でふまれる³¹⁾他はないであろう。しかし、この世にあって苦難にあえいでいる人々の苦難をとともに担おうとする時、その積極的な奉仕、働らきの故に教会は教会たり得るのである。エキュメニカル・ムーブメントこそは、まさしくそのような、教会に生命と使命とを注ぎ込むものである。しかも、その含む範囲は、教会が人類のあらゆる罪と苦難の救済にかかわるものであるだけに、広範多岐にわたるのである。したがって、本論文において、われわれが取扱って来たところも、その広範多岐なエキュメニカル・ムーブメントの極く狭い範囲に限られている。

19世紀の教会活動の中で、エディンバラのIMC、アムステルダム(WCC)と連らなる最も重要なものは三つあり、その一は諸教会の宣教活動であり、そ

の二はYMCA, YWCA, SCMの諸活動であり、他の一つは、キリスト教社会運動であった、というのがわれわれの見解である。それ故、前者が創設された時点に視点を置いて、1850年を中心として、その前後10年余の時期における両運動についての展望を試みた。

しかしながら、このような問題の取扱い方は、この時点からさらに視点を移動せしめつつ出来事の展開を追うことなしには意味をもたないのである。われわれもまた、時の推移と出来事のあとを追いつつ、さらに精細を究めたものとして積みあげていくことを念願とするものである。

(注)

- 1) カトリック教会の伝統を乗り越えて、プロテスタント教会からの代表者達をも招待した世界的な教会会議、第二ヴァチカン公会議、を開催しようという企画は、アンジェロ・ロンカリ (Angelo Giuseppe Roncalli 1881-1962) が、ヨハネス23世として教皇の職を執るに至った直後から彼の胸のうちに抱き始められたものであった。もとより、それは、彼が長年月にわたる聖職としての奉仕を通じて、胸のうちに秘め、エキュメニカル・ムーブメントの指導者達との交りを深めておったことから覗い知られるのである。(ラッツアリニ著、小林珍雄訳、ヨハネ23世、エンデルレ書店、昭和34年、p. 149) そして、この会議開催の意図は1959年1月25日、聖パウロ城壁外にあるベネディクト派の修道院において行なわれた教会一致のための礼拝における彼の説教の中で言明されたのである (Xavier Rynne, *Letters From Vatican City—Vatican Council II: Background and Debates—*, Faber and Faber, London, MCML XIII, p. 2,93.)。
- 2) エペソ書 2¹¹ f.
- 3) ヴィサー・トーフト著、菅岡吉訳、新しき教会の生命と使命、新教出版社、1960年、p. 79.
- 4) O. Frederick Nolde: *The World Council of Churches and Peace, An emerging movement for peace and justice*, *The Ecumenical Review*, World Council of Churches. Vol. XIX, No. 2 April 1967, p. 193 f.
- 5) Mt. 9¹², Mk. 2¹⁷, Lk. 5³¹, Mt. 5¹⁴, Jh. 1⁴, Mt. 5¹³.
- 6) 1 Cor. 1¹⁰ f.
- 7) Ruth Rouse and Stephen Charles Neill ed., *A History of the Ecumenical Movement 1517-1948*, S.P.C.K., London, 1954, p. XXIV., p. 6 f.
- 8) Edward Duff, *The Social Thought of the World Council of Churches*, Longmans, London, 1956, p. 20.
- 9) 「The Claims and Contribution of the Church of England appeared in the Church of South India」Chap, 1, 1953. 立教大学、及び「エキュメニカル教会の聖奠と宣教の使命」昭和36年2月、松蔭短期大学研究紀要、第2号、p. 26.
- 10) Cyril Garbett; *In an Age of Revolution*, 1956, A Pelican Book, Penguin Books, Middlesex, p. 15 f.

- 11) op. cit., p. 18 f. . . . It was only later that invention was the result of deliberate research. Capitalist and employers began saying to the men of science: 'Here is a new material: problem—find a new theoretic formula which will permit it to be produced.' Scientific research and experiment were enlisted both for production and for convenience, and safety of the worker. First, water was applied to production, and factories were built by the stream, often runing some of the fairest scenery in Lancashire and Yorkshire. Then steam was used to drive machinery. This was followed by a great increase in production, by the opening of coal-mines, and the building of new cities round the factories no longer necessarily sited in the valleys. In the last quarter of the century there followed the greatest change of all: the application of electric power to industrial and domestic purposes. Efficiency and production were enormously increased; the same amount of goods could be made in an hour for the production of which in the past weeks or months would have been required; one man with a machine could do what would have taken fifty men with only manual tools.
- 12) Garbelt op. cit., p. 114 f.
- 13) Elie Halevy, Imperialism and the Rise of Labour—A History of the English people in the Nineteenth Century—V—, Ernest Bern Limited, London, 1926¹, 1951², p. 57.
- 14) 八代崇著「世界史とキリスト教」1967, 日本聖公会, p. 166 f.
- 15) Garbelt, op. cit., p. 128.
- 16) この間の事情について、ヨーク大主教ガーベット師の年来の友人である日本聖公会総裁主教八代斌助師は、その著「アスムテルダムに先立ちて」（昭和23年、明和書院）の中で、次のように紹介している。「この大主教が、50年間の歴史のうち、最も驚くべきこととして特筆しているのは、所謂エキュメニカル・ムーブメントである。この教会合同に対する理解と運動、各教派間の協力遊交は、正しくこの50年間の驚異的事実で、50年前においては、聖公会と他教派の人々が協力し合うと言った様なことは、英国において見られなかった。」それのみならず、「彼の1920年『全キリスト教徒に告ぐ』なるアピールを出したランベス会議議長ランドール・ディビッドソン大主教は、新教各派に対して、心から愛情をもった最初の大主教であると言われている。同主教の25年間の在職中、ランベスの大主教邸を訪れた新教各派の人々の数は同師以前の200年間におけるランベス来訪者の数よりも多いと伝えられている……。」
- 17) Edward Duff: The Social Thought of the World Council of Churches, 1956, Longmans, London, p. 17 f.
- 18) A.E.J. Rawlinson: The Church of South India, 1951, p. 13.
- 19) 八代斌助 op. cit., p. 12.
- 20) Einar Molland: Christendom, the Christian Churches, Their Doctrines, Constitutional Forms and Ways of Worship, 1959, p. 369.
- 21) 日本聖公会歴史編纂委員会編「日本聖公会百年史」昭和34年, p. 1.
- 22) Paris Basis というのは、1885年パリにおいて世界Y M C A同盟が結成された時、

そのメンバーとなるものが心がけるべき項目を制定した。その中には、イエス・キリストへの信仰と生活の場における福音の証し、および青年の間に神の国拡張のための奉仕を实践すること等がかかげられている。

23) John 17²¹.

24) 1910年のエディンバラにおける I M C 会議を提唱し、その実現のために尽力した John Raleigh Mott はその初代総主事をつとめておったし、Faith and Order の提唱者 Charles Henry Brent (1862-1929), Nathan Soderblom (1866-1931) 等もそうであるが、Edward Duff も次の様に高く評価している。……(E. Duff, op. cit., p. 21 . . . If the International Christian Student Movement owed its origins to the missionary impulse, the Ecumenical Movement (the word first gained general currency, it is said, in WSCF circles), culminating in the World Council of Churches, is indebted to the Student Christian Movement in a fashion difficult to overestimate. The generosity and world vision of Protestant youth groups supplied in later years the leadership of the ecumenical organizations. An old photograph of the four General Secretaries of the WSCF-sponsored international Christian student relief organization offers striking evidence: Dr. John R. Mott became Honorary President of the World Council, W.A. Visser't Hooft its General Secretary, Robert C. Mackie, Associate General Secretary, and Henri-Louis Henriod served as Warden of the Ecumenical Institute . . . William Temple, Archbishop of Canterbury, who presided in May 1938 at the Conference at Utrecht which drafted the Constitution of the World Council of Churches . . . acknowledged that he glimpsed the possibilities inherent in the ecumenical ideal at meeting of the British branch of the WSCF. 'The great spiritual unity created by the Federation,' he wrote, 'appeared as an illustration of what the Church of Christ must become for all its members.' . . .

Among other personalities can be listed Archbishop Soderblom, whose attendance at WSCF international congress was a prelude to his chairmanship of the Stockholm Conference of Life and Work; Joseph H. Oldham and William Paton, introduced to the mission apostolate through the British unit of the Federation, the first being Organizing Secretary of the Oxford Conference 1937 and . . .).

25) R. Rouse & S.C. Neil. op. cit., p. 322.

26) 本文 II (2) p. .

27) R. Rouse & S.C. Neil. op. cit., p. 331.

28) Earle E. Cairns; Christianity Through the Centuries, 1954, (聖書図書刊行会訳, E・ケアンズ; 基督教全史, 1960年, p. 532)

29) op. cit., p. 571.

30) R. Rouse & S.C. Neil: op. cit., p. 331.

31) Mt. 5¹³.